
走る犬

紺野智夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

走る犬

【Nコード】

N7600I

【作者名】

紺野智夏

【あらすじ】

犬は走っていた。何故走っているのか、犬にも分からない。

犬は走っていた。

ボロボロになりながら、駆けていた。

何故追われているのだろうか？

犬は、その理由を知らなかった。

知らないまま、夢中で街を駆けた。

知らないのは、それだけじゃなかった。

自分がなんという名前か。

自分がなんという種族か。

自分は誰から生まれたのか。

何一つ知らずに、走っていた。

追っ手はすぐそこまで迫っていた。

逃げ込もうとした道は、

犬にはちよつと狭かったけれど、
それでも無理矢理に通り返けた。

追っ手を撒いて逃げた犬は、

気付くと小さな公園の中に居た。

「おかあさん、かいじゅう!」

子供の声と若い母親の小さな悲鳴。

水飲み場で水を飲もうとしていた我が子を抱え、

母親は一度も後ろを振り返らずに逃げていつてしまった。

犬は、啼いた。

悲しげな声は、すぐに闇に吸い込まれて、跡形もなく消えてしまった。

閉め忘れた水道から流れる水の音が、悲しく響いた。

犬は、身体中に水を浴びた。

体を洗い流すと、いくらかスッキリした。

ドロドロになり、ガチガチに固まった毛が解けて、

真っ黒い塊にしかみえなかった体は、金色に輝いていた。

しばらく公園を走り回り、風を感じた。

犬は、開放感を感じていた。とても、気分が良かった。

毛が乾いていく。気持ちが良い。このまま走っていたい・

その時。

「どこにいったんだ、まったく」

男の声がした。

犬は一瞬、たじろいだ。

さっきの追っ手の声だ。

どうやら、公園のすぐ側にいるらしい。

犬は、今度は噛み付いてやろうと、身構えた。

公園の入り口を駆け抜けて、追っ手の前へ飛び出す。

しかし、犬の予想を反して、

彼らは犬を追い掛けようと、捕まえようとしなかった。

「あれ？この犬、搜索願がでてた犬じゃないっすか？」

「ああ、シツコイくらい、何度も問い合わせがあつた犬だな」

「可哀想に、ゴールドちゃん、きつと今頃、震えているわ」

「うちのゴールドちゃんは、薄汚いそこの野良犬なんかとは違うのよ」ってか。だったら、逃げ出さないように、見てるよなって話だ」

「全くっすね。保健所に」間違えてうちのゴールドちゃんを殺したら、ただじゃおきませんわ」なんて、責めるところが間違ってるっつもの」

彼らは呑気に談笑をしている。

犬は、どうしたらいいものかと、その場で様子をつかがうことにした。

「で、この犬、どーするよ？」

「どーするって・・・ほっときましょうよ。」

「俺らの仕事はあくまで、危険な野良犬を捕まえることだからな」

「そうっすよ。下手に連れて帰って、」うちのゴールドちゃんをど

うするつもりだったの”なんて言われたら、たまりませんし。此処に居たって、教えてあげればいいんじゃないっすか？」

「迷い犬は管轄外、そういうことだな。」

2人は、話ながら、路肩に止めてあったトラックに乗り込んでしまった。

どうやらもう追ってこないらしい。

汚くないから？

飼い犬だと、分かったから？

犬はなんともいえない気持ちになった。

とぼとぼと、街の中をゆっくり歩いていた。

30分くらい歩いていた頃、急に背後から、大きな声がした。

「ゴールドちゃん！！！！」

振り返ると、おばさんがこちらに向かって、走ってくるのが見えた。

誰だ

なんだ

一体、どうする気だ！？

犬は走った。

おばさんは必死で追ってくる。

「ゴールドちゃん、私よ、私がわからないの!？」

わんっ わんっ

逃げるしかなかった。

恐かった。

何故追い掛けられているのか。

犬は、知らなかった。

「私を見てわからないなんて!! ゴールドちゃんはそんな子じゃないわ! きつとアレはゴールドちゃんじゃない・・・どこかの間抜けな野良犬よ・・・! そうよ、そうにきまってるわ!!」

遠くから、声がした。

足音が聞こえなくなり、追っ手の気配も消えた。

だけど、犬は止まらなかった。

何も考えず、走った。

知らない

茂みを抜けて

分らない

泥まみれになって

それでも、走り続けた。

気が付くと、薄暗い空の下に、取り残されていた。

今日はどこで寝ようか。

昨日は公園のドカンの中で夜を過ごした。

走り疲れて、ぜえぜえと息をした。
喉が渴いた。どこかで水を飲みたい。

そう思った時

急に目の前が真っ暗になった。

「コイツですね、例の野犬」

「ああ、間違いないな。」

「早く処分してしましましょう」

街には「黒い獣」のウワサが流れていた。

犬は犬だった。

犬はゴールドちゃんだった。

犬はかいじゅうだった。

犬は薄汚い野良犬だった。

犬は飼い犬だった。

犬は黒い獣だった。

犬は犬だった。

犬は 記憶を無くした 犬だった。

（後書き）

原作「No Remember Dog」	2006/04
改稿「走る犬」	2007/12/17

世の中への理不尽なことを、童話調に書き表したくて、
やってみたらこうなりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7600i/>

走る犬

2010年12月26日20時33分発行